3. 教職フィールドワーク（韓国） Field Experience in Education (Korea) レポート

私たちが見た韓国の英語教育
「教職フィールドワーク（韓国）ー参加者リレーエッセイー」

芦谷 愛　大西 晴日　重川 遥香

1. はじめに

私たちは8月30日から9月5日まで「教職フィールドワーク」で韓国に行ってきました。最初の2日間はソウル市内のフィールドワーク、残りの5日間を京畿道英語村パジュキャンプ（以下、パジュ英語村）で過ごしました。ソウル市内フィールドワークでは世界遺産に登録されている昌徳宮をはじめ、景徳宮、民俗博物館、梨花女子大学、明洞や仁寺洞や北村の街並み等、短い時間で様々な場所を訪れ韓国の文化や生活に触れました。韓国は日本から2時間ほどで行くことができ、日本と似ているところも多くあったのですが、実際に韓国を歩いてみると様々な違いを感じました。

パジュ英語村では Educational University Student Program (Pre-service Teacher Training) に参加しました。参加大学は、日本から大阪教育大学、京都教育大学、長崎国際大学、大阪女学院大学の4校、韓国からは京仁教育大学の1校、人数にして22人でした。朝の9時から夕方の6時まで英語づけで、毎日とてもハードながら楽しいプログラムとなりました。教師はネイティブスピーカーで大阪女学院と似た環境でしたが、韓国の学生の熱心さと語学能力には驚かされるばかりでした。

また、私たちはプログラムの3日目にパジュ英語村を離れ、大阪女学院大学の協定校である私立礼一学園（Yale 学園）を訪問しました。礼一学園は小学校から高校まであり、私たちは高校の英語の授業と小学校の英語の授業を参観しました。授業参観後、パジュ英語村に戻り、プログラムの一環で公立小学校の英語の授業を見学しました。韓国の教育については日本でも話題になっており、自分でも調べた上でいったのですが、どちらの学校もさすがとしか言いようのない素晴らしいものでした。

本稿では、参加学生3人で各章を担当し、リレーエッセイの形でフィールドワークの成果を報告したいと思います。

（芦谷 愛）

2. パジュ英語村の英語プログラム

パジュ英語村では2人1部屋のルームシェアで、私は韓国の同じ年の学生とルームシェアをすることになりました。初めてのルームシェアで緊張もありましたが、他愛のない話から、お互いの国の文化や教育などについて話すことができました。彼女は韓国の大学でどの学部が人気で、どの職業が人気なのか、また韓国の教育に対する考えを話してくれました。その一方、私は今まで情報の断片にしか触れず、自分のしっかりとした考えを持っていなかったため、彼女に日本の教育について上手く話すことができませんでした。得た情報を整理し、自分の考えをしっかりと持つことは韓国で見つけた私自身の1つ目の課題です。英語村でのプログラムの目的は、英語のスキルを伸ばすことでした。授業のスタイルはコミュニケーションに重きを置いているという印象でした。この授業で驚いたのは、韓国の学生の英語力の高さと積極性です。私は大阪女学院では積極的な方だと思っていましたが、韓国の学生の英語力の凄さを目の当たりにして自分の意見が全然言えない状況でした。その時、自分に足りないのはボキャブラリーの少なさであると痛感しました。

（大西晴日）

英語村でプログラムがスタートした当初は人見知りをしてしまい、なかなか女学院以外の人とは話せませんでした。しかし、プログラムの内容が絶対にほかの人たちと関わらないとできないものばかりで、自然と打ち解けあえるようになりました。“Ice Breaker”という授業では、壁に事前に撮影した写真が印刷された紙が貼られました。そして、相手を見つけ、質問した答えを相手の顔が印刷された紙に英文で記入します。それを何度も繰り返し、時間になると、ランダムにその紙が配られました。その配られた紙に書いていることを読み上げ、ほかの人が誰かを当てるというゲームのような活動が行われました。この授業があったおかげで、その後からはほかの人に喋りかけやすくなりました。

クラス分けテストは、私の勝手な想像で、筆記試験だと思い込んでいました。しかし、先生と一対一での口頭質問形式で、とても緊張しました。今まで、そのような経験がなく、いつも以上に自分の思っていることを英語にし、伝えることが難しかったです。

授業はゲーム感覚で学べるようなものが多かったのですが、しっかりと idiom や slang なども学び、そのあとにゲームで実際に学んだものを活用し、習得するというような流れでした。他にも、“Clinic”という授業では、あらかじめペアで医者と患者の役割分担をし、スクリプトを考えておき、病院を再現した教室へ行き、皆の前で発表しました。どの授業でも私含め、日本人は静かな印象を受けました。反対に、韓国人は積極的に発言し意見をしっかりと述べる学生がとても多かったです。私は、積極的に発言しないといけないとは思っていたのですが、自分に自信が持てず、なかなか全体授業では発言することができませんでした。

プログラム後半になると、授業後に最終日に行うプレゼンテーションに向けての準備時間が設けられました。プレゼンテーションのグループ決めが行われ、発表内容は自由でした。私たちのグループは韓国と日本のスターの比較について調べました。それぞれに有名な俳優、アイドルグループについて調べ、代表作のドラマのワンシーンや、ダンスを覚えました。私たち日本人は、スクリプトを作るときに、日本語で考えてから英訳をするというようにして作っていました。しかし、韓国人はわざわざ韓国語を英訳するのではなく、考えを英語でまとめており、これには驚きました。だから、スクリプトを暗記するときに、私たちは覚えることに必死で、何度も口に出し、一文ずつ暗記するという状態でしたが、韓国人のメンバーは一文ずつ覚えるわけでなく、自分の考えを頭に入れておき、それを英語で伝えるという印象で、暗記しているわけではありませんでした。

最終日は、プレゼンテーションの発表が行われました。聞いている人たちは、発表側が質問を投げかけると、答えてくれるし、きちんと反応が返ってくるので、発表者としてとても発表しやすかったうえに、プレゼンテーションの楽しさを味わうことができました。他のグループの発表も、韓国と日本を比較したものが多かったのですが、初めて聞くこともたくさんあり興味深いものでした。全グループの発表終了後に、先生からのフィードバックがありました。一人ひとりにコメントがあり、良い点と悪い点を教えてもらったので、これからプレゼンテーションするときに気をつけようと思いました。

すべての授業が終了し、クロージングプログラムでは今までの写真などがまとめられたムービーがサプライズで流れました。そして、一人ずつ修了書をいただきました。長いと思っていたプログラムもあっという間に終わり、参加して本当に良かったと思いました。

（重川遥香）

3．韓国の英語教育（授業参観）

私が韓国の英語教育について知りたかった項目は以下の 5 つでした。1）教員は授業の準備にどれくらいの時間をかけているのか、2）IT を授業でどれくらいの割合で使用しているのか、3）英語を教科として取り入れるにあたって、各授業のコマ数はどのようになったのか、4）一番英語教育に力を入れているのはどの年齢なのか、5）歴史教育をどのように行っているのか。まず 1 つ目の項目に関しては、礼一学園の高等学校で英語の授業を行っていた Yoon 先生に尋ねてみました Yoon 先生の場合、週末に翌週の準備をまとめて行い、1 クラス 2 時間くらいかけていると仰っていました。準備はまず、頭の中でどのように授業を進めるか、なぜこの内容を勉強するのかを整理しているそうです。また Yoon 先生は、生徒のレベルを伸ばすには先生の努力が大切だからと、海外に住んでいる友人と頻繁に連絡を取って沢山の情報を集めているとも仰っていました。韓国の英語レベルの高さは、先生の努力があってこそのものなのだと感じました。次に 2 つ目の項目に関しては、高等学校と小学校ともに、私が予想していたよりも教室のデジタル化が進んでいないと感じました。私の予想は、紙の教科書は使用せずにタブレット端末を使用しているというものでしたが、実際見学してみるとデジタル機器は電子黒板がメインで教科書は紙のものを使用していました。そして、私が日本で受けてきた授業と礼一学園での授業では全く違う点が一点ありました。私が受けてきた授業では、先生が板書し生徒はノートを書くというものでしたが、礼一学園では先生は殆ど板書をせず、生徒が自分で必要だと思ったことをテキストに直接書きこんでいました。私が受けた授業スタイルでは先生の板書を写せばよいだけなので、それほど頭を使わなくても授業に参加することができますが、そのスタイルだと自分で情報を整理する力も、考える力も付きません。だから、大学の講義のような授業スタイルを高等学校で取り入れている礼一学園を見て、私が受けてきたような授業スタイルには少し改善が必要だと思いました。次に 3 つ目の項目に関しては、小学校の先生に尋ねてみました。礼一学園の小学校では週に、国語 5 時間、数学 4 時間、社会 3 時間、理科 3 時間、音楽 2 時間、美術 2 時間、体育 2 時間、PC2 時間、英語 5 時間、中国語 2 時間、道徳（聖教も含む）1 時間のコマ分けになっているそうです。このように見ても、英語の時間数は国語に並んで 1 番多いし、その上、小学生の頃から中国語の授業があるのには驚きました。残りの 2 つの項目については、残念ながら明確な答えを得ることはできませんでした。4 つ目の項目に関しては、小学校と高等学校を実際に見学してみて、基礎となる小学校に力をいれているのではないかと想像したし、5 つ目の項目に関しては、デリケートな問題で自ら直接聞くことは出来ませんでした。

この学校訪問で、韓国の英語教育のレベルの高さに驚かされましたが、その一方で、情操教育のコマ数が少ないことが気になりました。私は子どもにとって情操教育は大切なことだと考えているので、韓国のような時間配分には疑問も感じました。ただ一つ、これは日本の英語教育に取り入れた方が良いと感じたものが一つありました。それは高等学校の授業で見た、英単語の説明の仕方です。英単語は母語で訳すと同じ意味を持つものが複数ありますが、日本の学校では意味を日本語訳で教えるため、微妙なニュアンスが分からないまま英語を学ぶ形になってしまいます。しかし、礼一学園では先生が、単語を使うシチュエーションを用意し、英語と韓国語を交えて説明していました。このシチュエーションを用いてイメージさせる過程は、後に英語学習を進めていく上で大変役に立つのではなかと思いました。今後日本も、英語を話せる日本人を増やすために、さらに英語教育に力を入れていくでしょう。その中で、日本の教育の良い部分を削り過ぎないようにしなければならないと思いました。　（大西晴日）

今回のフィールドワークの中で、私にとっては礼一学園訪問の経験がとても心に残りました。韓国の英語教育は日本でも話題になるほどで、私も授業を見学できることをとても楽しみに、もちろんある程度下調べをした上で韓国に行きました。しかし実際に行ってみると自分の想像を遥かに超えたとてもレベルの高い教育がされていました。私たちが見学したのは高校2年生の英語と小学校の授業で、ちょうど見学に行った日が高校3年生の最後の模擬試験だったため校舎内はとても静かで緊張していたように感じました。礼一学園は大阪女学院と同じく少人数で授業を行っており、大学の授業と似ていると感じたのですがその内容は大学となんら遜色なく、むしろ進んでいるのではとさえ思わされる内容でした。日本では授業の際、教科書だけでなくノートや参考書にプリント、そして英語の授業では必ずと言っていいほど電子辞書が机の上にあります。しかし見学した際学生の机の上には教科書と筆箱のみでした。その中で私が一番驚いたのは辞書を使わないということです。これは英語村での韓国の大学生も同じでした。一人として電子辞書や携帯の辞書などを使っておらず、この点が日本と韓国の授業の一番の違いだと感じました。また授業は英語が主に使われており、韓国語はその説明のために少しだけ話されている程度でした。先ほどノートが無いと言いましたが、板書もほとんど無く学生たちも先生の言葉を聞いてそのまま教科書に必要事項をメモしているという具合でした。日本の高校で同じことをすれば間違いなく学生たちは混乱すると思いますし、自分が今高校に戻ったとしても文法の説明など板書が無ければ今でも厳しいのではないかと思うのですが、韓国では当たり前のように行われていました。他にも私が驚いた点は韓国の高校生の傾聴の姿勢でした。先生や学生の誰かが発言するときはそちらの方を向き真剣に聞く姿は学生とはこう有るべきだと感じさせるものでもあり、日本の学生が出来ていないことだとも感じました。もちろん私語はなく全員が真剣に授業に臨んでおり当てられたときもすぐに答えを言っていました。高校生だけでなく、授業参観した小学生やパジュ英語村で一緒だった韓国の大学生も同様でした。そのような姿勢から私が感じたのは、韓国の教育は学生が発言することが恥ずかしくない状況なのではないかということです。母語である韓国語の授業ではなく、英語で行われている授業であってもきちんと英語で受け答えができ、教師の側も真剣に発言を聞くというのは日本では意外に少ないことでしょう。

韓国では英語が文法的に間違っていたり、どのように説明すればいいのか戸惑っていても、その言葉の意味を聞き取って言い直すことで授業が進んでいました。文法的ミスなどをその場で咎めるのではなく、英語で話すことを重視しているように感じました。もちろん日本でもスピーキングの授業であれば同様のことは行われているでしょうが、日本人教師が行う普段の教科書や文法の授業では難しいのではないでしょうか。韓国人が今世界で活躍しているのは韓国の英語教育で生徒一人一人が自信を持って英語を話すことが出来る環境が整っていることだと感じました。こういったことからも教師自身のレベルの高さをひしひしと感じることが出来ました。授業後に高校の方の英語の先生とお話する機会があったのですが、とても勉強になりました。韓国の学生は日本の学生に比べ大学受験がとても難しいこともありレベルが高いと思っていたのですが、教える立場である先生も授業をするためによく準備をしておられました。ただ授業に備えるというわけではなく、定期的に外国に住んでいる知人と連絡をとるなどして常に新しい情報を手に入れているそうです。韓国は日本よりもIT社会で、先生自身も生徒の方が新しい情報を手に入れている場合があるために常に新しい情報を手に入れる努力をしているそうです。また、先生は授業の目標として自分のレベルに生徒を引き上げるということを決めているそうです。私は自分が教師になったら上手く授業の内容をこなしてなおかつ分かりやすければいいかというぐらいにしか考えていなかったので、この先生の話は衝撃的でした。

（芦谷愛）

4．韓国での経験を通して私たちが感じたこと

今回のフィールドワークを通して様々な人に会うことができ、そのたびに色々なことを学ぶことができました。まず、韓国の人はとても勤勉だということです。小学生の頃から塾を日にいくつか掛け持ち、大人になっても朝早く起きて勉強するという話には本当に驚きました。私は韓国に行くまでは、韓国というのは怖い国という風に感じていたのですが、韓国は良い意味でとても貪欲な国なのだと思うようになりました。国に対する見方が変わっただけでなく、自分自身にとって大きく価値観が変わりました。礼一学園での授業参観の経験はこの「教職フィールドワーク」でしかできないことなので、今回プログラムに参加できて本当に良かったと思っています。また、パジュ英語村で教員免許取得という同じ目的を掲げた友人とともにこのプログラムに参加したことで、偏りがちだった自分の教師に対する視点が変わったようにも思います。私は教師というものに苦手意識を持っており、韓国に行くまではどこか批判的に教職課程の授業を受けていました。しかし韓国で実際に教師をしている人、その生徒また教師を目指している人と出会ったことで自分の理想とする教師像が見えてきました。今回の経験は何度も教職を辞めてしまおうと思っていた私にとって大きな転機となりました。自分の理想となる教師像が見えたことで、一時は辞めてしまおうかと思っていた教職を秋学期からもう一度がんばろうという気になりました。今回出会った人々ともう一度会うということはないかもしれませんが、今回の経験を大切にしていこうと思います。

（芦谷愛）

今回、フィールドワークに参加するにあたり、私は韓国人が英語教育や有名大学進学にすることをどのように捉えているか知りたいと思っていました。ガイドさんの話では親は子供のために死ぬ思いで必死に働き、塾に行かせていると聞き、みんなが塾に行くことが当たり前なのだと思っていたのですが、そうではないことがわかりました。塾に通わせるために、しっかりと学べる場所がある地区に住まなければなりません。すると、周りの地区に比べると、とても地価が高いそうです。だから必死で働き、学校へ迎えに行き、塾へ送り、また塾が終わると迎えに行くという行動の繰り返しだそうです。自分のための時間などなく、全てを子供に捧げているそうです。ガイドの方は、このような韓国の状態は良くないと思うそうです。子供が有名大学に進学できるように塾に行かせ、送り迎えをし、子どものために自分の時間の全てを費やすぐらいでないと、周りからは良い母親と思われないそうです。また、英語村で一緒に学んだ女子学生に韓国の英語教育について聞いてみました。朝 7 時に学校へ行き、勉強し、お昼休みは 10 分でご飯を食べ、残りの 40 分は図書館で勉強しているそうです。放課後は塾へ行き、帰宅時間は 22 時を過ぎるそうです。しんどくないのかと聞いてみると、塾で学んでいるから、学校の授業が簡単すぎてつまらないとのことでした。二人の話を聞いてみて感じたことは、親は子供に全てを捧げ、子どもは勉強に全てを捧げているということです。きっと、何年かかってでも頭の良い有名大学に進学することが親への恩返しにもなるのだろうと思いました。韓国の教育熱心さには驚き尊敬しましたが、決して韓国が良く日本が良くないとは思いません。たしかに、英語力は完全に韓国が優れていましたが、小さな頃から勉強漬けで遊ぶ時間がないので、将来人とうまく関わっていけるのかなと思いました。日本でも、勉強に全てを捧げ過ぎて、頭は賢いが、一般常識が欠け、人とうまく関われなかったり、挫折した時に立ち直れず、道を外れてしまったりしてしまう人がいます。上手くバランスをとるということが一番難しいのですが、韓国の英語に対する教育熱心さが日本に少しだけ必要だとも思いました。

（重川遥香）

フィールドワーク全体を通して、いかに自分がメディアやインターネットの情報に振り回されていたのかが分りました。日韓関係があまり良好でない中、溢れる情報の中には韓国を非難するものが多く存在しています。私のような学生が、情報の正誤を確かめることは出来ませんが、自分の目で見た韓国は私が持っていた印象と違いました。むしろ、困っていたら手を差し伸べてくれる人が沢山いる温かい国でした。今回、メディアを通して知るだけでなく、自分の目で確かめることは大切なことだと実感することができました。また、学校で学んでいるうちに忘れていた、言語を学ぶ目的が明確になったのも大きな収穫でした。学校では TOEIC のスコアを伸ばすためだけに英語を学んでいる錯覚に陥っていましたが、英語村での交流を通して、言語は思いを伝えるツールにしか過ぎないこと、また、言葉が通じる喜びを実感することができました。そのことで、自分は英語と韓国語、そして韓国の文化が好きなのだと再確認できました。今回の経験と思いを忘れず、今後の学びにしっかりと繋げていきたいと思います。

（大西晴日）